

ジュニアシロジロー 二〇〇一年版



うろこアンソロジー二〇〇一年版 目次

暗中	足立和夫	3
声	小泉伸明	6
季碑	海林美今日子	8
詩人	みー	10
寝ほけ草	文旦(松尾龍之介)	12
夏の切手	桐田真輔	16
観覧車恐慌を露光する	平井弘之	16
水面に浮かぶ果実のように	田中宏輔	22
待っている	須永紀子	30
お気をつけて!	いつき・たつき	30
その向こう	三井喬子	37
ループ	山岡広幸	40
濃桃の日	若井弾丸	42
愛子さんとチョコレート・パフエ	ていだきねこ	48
ブループラトー	高田昭子	50
冬の姉たちへ	一本指	53
あおのいたまま	阿瀧康	55
いつも、送電塔	koko(賀川紅子)	57
恋のゆくへ(俳句)	吉野茂	59
1 Love New York	石川為丸	61
島惑ひ 私の	片野晃司	64
色・かたち	関富士子	72
河の風景	清水鱗造	77
横たわる人	か/kaoki	79
千円		
	青木栄瞳	44

暗中

足立和夫

暗く輝く舗道に
群れるひとの息
灼熱から遠ざかるからだに
ひっぱられ
脇道にそれて
ひんやりする暗がりに
肩を入れる
夜に流れる
うすい闇は
底なしだ
ぼくは冷たい空気のなかを

ことさらゆつくり歩く

いつでも闇は

孤独を新しくして

逃れられない人生を

葬るようにみえる

呼吸が肺をぬけていく音

死は謎のように

いつもそばにある

ぼくは闇に溶けていく部分の

ひとつなのだろう

その冷徹な想いは

静かにあたりまえのように

からだじゅうに届いていく

反転することのない暗黒の奥底で

伶俐な星たちはみずから爆裂をつづけ

とてつもない大きな沈黙を

苛烈な天空に解き放ち
光の束とともに
ぼくを襲撃しつづける
逃れることはできない

声

小泉伸明

あっと思った瞬間「カサツ」と音がした
セミの死骸であった

夏の太陽に乾かされ

セミのカラダは光の中で影に覆われる

そして「カサツ」という音と共に

影から飛び立ち

何日ぶりかの光を浴びた

セミが大声で鳴くのは

誰かに探してもらいたいからだ

鳴かなくなつたセミは死んでいる

それから踏んづけられて音を出し
影の中に生を宿す

動的なものではないのだが
夢の狭間で回想するのだ

季碑 交信

海禁今日子

手紙をつづろうとする彼、あまりにもふるえる枚数、失われなかったものを見のがす、見のがさないために、ふるえる指の彼、かさばる紙面、彼の日付に出向きたい、引きとめられる、押しもどされる比例について。水にあらがう視線、ほつれた行間、残り火のような文字に隠れる。

彼は投函をまどいつづける、手あたりしだい掴まれた昨日、穴のよ
うな紙片から、私、差し入れてみたかった、剥がれつつある瞼の脇、
毛羽の目立つ便箋、一滴、そして三滴の。だれの過去も明日だった、
立ち上がる空白、差しもどされる、返信のたおれゆく、彼らの眼、
滲ませるにはなお足りない。

かたわらで、日記をやぶく、愛された子として、流れついた独りを

見いだす。かたわらで、むしりつづける、鏡のない文字、彼らの視線、白眼だけがおぼえている。見つけること、つまづくペン、配達された、されないかもしれないページをめくる、耳のような記述があった。痛い瞬間の降りしきる。

愛された子、と添えたかった。おびただしい通信が、彼のありかをふるわせる。指のとける彼、とじられない眼の奥で、うずくまる子、

詩人

みー

高田敏子っていう詩人がいるのよ

同姓同名の母が嬉しそうに微笑みながら

私に言った

もう随分と前のことなのに、なぜ憶えてる

君の目は詩人の目だ

行きつけのレストランである老人が

僕に言った

髭を生やし始めた学生時代、他愛も無い事なのに

なぜ憶えてる

孤独を飼いならし損ねた私にとって
書くという所業は恥以外の何者でもなからうに

なぜ？

寝ぼけ草

文旦（松尾龍之介）

てのひらに牛の鼻息雲の峰

牡丹寺寄り目あらはに鬼瓦

夏雲の湧くを見てゐる目の痛み

石投げて萍に穴つくりけり

ふるさとの蝉の聞こゆる電話口

赤腹のもんどり打って潜りけり

末若葉仕事の捗の行く日なり

初秋の水はみがきを含みけり

朝顔や食後の猫の身づくろひ

秋の夜の石膏像に白き布

振り向いて秋の燕と訣れけり

星降るを見ている額のこそばゆし

川上は別の川の名茸狩

胸倉に入るる風あり芋畑

入れ代わり立ち代わりして小鳥来る

月に飛ぶかげらふの翅十文字

島国をはみ出しにけり翺雲

稻雀草屋根に影浴びせけり

露草の一花余さず吾に向く

月の夜の国を離るるエアライン

我ながら機嫌良き日や種を採る

ががんぼの寝押しとなってゐたりけり

秋空へ三国一の大鳥居

永き夜の短波放送うねりけり

夏の切手

桐田真輔

7月8日（花言葉はトルコ桔梗の「優美」）

郵便局でまとめて切手を買った帰り

文庫本片手に散歩して

堤防の土手で寝ころんでいると

暗い飴色の雲にまぎれて

カモメのような鳥がゆらゆら消えてゆき

夏が水の入ったバケツをぶちまけた*

ニセアカシアの林を抜けて

逃げ込んだ公園の休憩所の隅に
白いワンピース姿の君がいた
胸には明るい花の刺繍

ほどなく僕らは短い挨拶をかわし
身に降りかかった災難を慰め合った

紫色の花咲けど

標もなくて野守もいない

道にはヤモリが干からびていて

ノースリーブの君は

袖がないので手をふるばかり*

濡れた文庫本の裏表紙に

そんな悪戯書きをみつけて

君の横顔が笑うと乾いたページの間に

買ったばかりの切手が何枚もこぼれ落ちた

8月8日（花言葉はツツジの「愛の喜び」）

切手のない葉書が届いた

代わりに短冊のような紙が貼ってある

この郵便物は取扱中に郵便切手が

離脱したと認められますので

このまま送達します*

「お元気ですか

私は今 海の見えるホテルのテラスで

あのとときの白いノースリーブのワンピースを着て

アイスティを飲みながらこの葉書を書いています

横の水盤には紫色のトルコ桔梗が生けてあつて

その影でさつきからやもりが一匹

眠ってるみ〇いにじつとしてるんですよ

あなたの変な歌 思い出〇ちやいました

これから夕立が来そうで風もでてきたみたい

夜〇ぐつと涼しくなります

この葉書 あの時いただいた

〇〇〇の切手を貼っていただけますね」

あいにくの雨が葉書の文字を

ところどころ流してしまつたようで読みにくい

なぜか思いだせないのだが

あれはなんの切手だつたんだろう

註)

* 田中宏輔詩集『The Wasteless Land,』より。

* 「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」

額田王のうた（『万葉集』）より。ただし原型を留めず。

* 福生郵便局。

〈アンソロジー投稿にあたっての註〉

「この作品は、川本真知子さんとのデュエットで、詩誌『Intrigue vol. 10』に掲載していただきました。いくつかの共通の言葉を使って、別々に作品を書くという試みです。詳しくは、川本さんがホームページに詩誌全文を掲載しておられますので、興味を持たれた方は、ぜひ、そちらもご覧ください。」

川本真知子さんのサイト
[Machiko Kawamoto's Home Page]

観覧車恐慌を露光する

平井弘之

観覧車に乗ったことありますね。

大きな欲望をまわすその観覧車が台場の風を切ったとき、
そのできごとは始まります。

観覧車が台場の風を切るとき

早くから開けている音楽の店に彼女は居る

体験はない黒いまま

何回も耳は腫れた

すぼんだ回想を指でたたいている

まがった口許は焦げた

一回きりのステンドグラス上の光の攻撃なのだけれども
それはまたたつたひとつの怠慢でもあった
巨大な冷凍パーソナリティを食べているさいちゆうに
本来の性格に清く打ちのめされている

観覧車が眼のしたの隈を洗うとき

台場の街が凍る口づけをして

リョウタ君のお母さんのまな板の音は生理を掠めていた
咲き始めた額紫陽花の頰を

海の向こうの地下鉄のいちばん深い河の中で

お母さんは泳いでいる

畸形の休みと羽のおと

良く聴けよ

観覧車が湾岸の向こうに飛行場を見下ろすとき

屋根の上で独身の会計士が閃光

闘牛士の格好で血を吹いている

ゴガーデン 明け方のうすらいでゆく夢の中で

熱い首都の首切り鎌を鳴らしながら

緩慢な日記と家計簿、連絡帳

リョウタ君のお母さんはビーチパラソルに近づいて行く

何も無いと思っていたテーブルを強振

公団飴色の空気の残骸からひよっこり現れたものに

テーブルを裂いてひよっこり現れたものに

頭のないおとこ友だちの青空は黙る

禁断症状の初夏の日射しだ楽曲

観覧車が足の毛を剃っているとき

壁に塗られた超高層の湯浴みする夜景

海の向こうの地下鉄のいちばん古い河に架かる橋のたもとで

光る硬貨の模様も溶かしている

毛細血管のようにお転婆な記憶を止めて
飛び移る水の背中に

老人の怠けたボタンを押せば
華やかな火の連弾がきそう

消えかかる陸上競技を打てよ

深くおりおりの花の血栓を欠いて

年中綺麗で居なよ報知器の子の予備よ

☪ それから肝心なこと

何月の何日に

今から云うことをやってもらう

一度海の向こうの地下鉄に乗ってから

ある人に会ってもらおう

報酬は出来高払い

草も刈らずに

切符だけ買えば良い

らかな仕事だよお

問題は観覧車の早さなんだ

そくど

そうして風の必死な温度が笑う一匹の蛾をつぶすとき

フランスの煙草を意味もなくくわえ

小さなスケッチブックに定例の書き込みを几帳面にすると

それもいくぶん走る速度で終えると

女の声で「ああ素敵な夜の海だわ」

それから男の声で「これじゃあ逃げ出す前に吸い込まれちゃうよ」

それからつぶされた蛾の声で「しっかり前を向いてー」

リョウタ君はもうスプレーのなか

観覧車をもっと速く廻るとき

アジアのリングに朱色の遊園地まで見える

海の向こうで地下鉄に乗っている夫の心は見えないけれど

早い時間から開いている音楽の店で

遅い昼食をとった人なら誰でも乗れるし

沈黙の硬貨を数え終えた人から降りることができるわ

備え付けのテレビジョンには

なぜなのかフランスの古い映画が滲んでいて

探偵を殺したジャン・ポール・ベルモンドが

妻のカトリーヌ・ドヌーブに殺されかけているのよ

ぐるぐるぐるぐるぐる

ごーごーごーごー

「はい、こんばんは、今年はなんて暑いんですよ」

ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる

ごーごーごーごー

決済の日だ夏のガーデン

初出『00-12』00企画室

水面に浮かぶ果実のように

田中宏輔

いくら きみをひきよせようとしても

きみは 水面に浮かぶ果実のように

ぼくのほうには ちっとも戻ってこなかった

むしろ かたをすかして 遠く

さらに遠くへと きみは はなれていった

もいだのは ぼく

水面になげつけたのも ぼくだけれど

待っている

須永紀子

ラジオからZA音が流れている
テーブル上のパン屑。カップ。茶色の澱。
午後二時の陽ざし。
あのひとは出かけてしまった

チューニングを合わせて
まともな音を聴きたかった
できれば音楽、バツハとかヴェルディ。
そして考える

わたしがここにいる事実が
二人の関係を説明することにはならない

ということについて

わたしは3つの番号を合わせてキーをあけたのだ

あのひとは誰にでもナンバーを教えてしまう

今知らない人が入ってきてても

さるという理由はないが

帰ってもらおう方法が一つくらいはあるだろう

気を悪くさせることなく

二度と来ないようにする手立てがあるかもしれない

と考えて

「手立て」というのは賢いことばだ、と思う

手加わるとコトは複雑になる

手筈。手加減。手心。

どんどん賢さから遠ざかっていく

手練れ。手管。手合い。

ZA音が切れ目なく流れるなか

つながることばをさがしながら

壁面にしかけられたカメラのように

目は室内を移動する

わたしは壁のようなもの、壁でしかない

新しい認識が突然やってきて

奇妙な明るさに満たされ

わたしは動くことができない

お気をつけて！

いつき・たつき

人の柔肌が

温もりが

息づかいが

心地良いのね

あーよかった

私は眠れない

今にも

目を閉じて目玉ばかり

ぐりんぐりん動かしてる私の
身体の奥底から悲鳴もなにもなく
もう一人の

私が浮かび上がって
貴方の首に手をかけそう

喘息を起こした

修学旅行

枕投げの残骸が

遅れて空から降ってきて

気付けば

冷えた空気の狭い天井の下に

一人移されて

よく眠れましたか

ええ5時に起きました

あのまま

寝ている日が

一日でもあつたら

私は多分誰かをいいえ

何かを潰そうと必死に必死で

掴んで締めて悲鳴が落ちてきた

大気をまくり上げて私の心に楔を

打つ

はず

今度やろうかしら

貴方の寝顔があまりにも

柔らかかに崩れずに在るのが憎い

私の手はまだ白くてまだ広がっていく

「^キ」

「[!]」

その向こう

三井喬子

その向こう

と あなたが指差したそこに

一本の木が生え

傘を傾けた女が小走りに行き

紅殻格子に灯が点り

野良猫が軒端に蹲り

一本の木の下に物語が生まれるころ

あなたはもう列車の窓際の席で夕刊を広げている

お腹はいっぱいだから コーヒーを買うかも知れない
今発つてきた駅の 街の 風景などは忘れてしまった

でしょう そうでしょう

と言ひ募つても 戦争のニュースには敵わないから
創世記から砂漠の現在までを語り続けて

一本の木が枯れる

その向こうに彷徨う湖の記憶が

かすかに苔のにおいを発し

猫も眠れない

眠るな

眠るな夜空

星辰の位置は不動ではないから

カラカラカラと零れてくることもあるだろう

悲しみの湖岸には

またしても一本の木が生えて
短い一生を孕むだろう

ループ

山岡広幸

じゃあまた。

手をふる

遠ざかっていく

背中がひとつ

めぐる軌道を

たしかめるように

何度も

ふり返っては

踏みしめて

そしてだれも行く
また あした
めぐり逢うため

濃桃の日

若井弾丸

ひんまがった金網フエンスを一周して冬が終わりました

冬の鳥たちはかんぺきに昇天し

エロチックなお魚たちがとろけています

はねかえり飛び散った火花はなんだったのですか

それからまだきみのお月様痛いですか

愛のほんとうの顔がみえなくて

濃い桃の花をちぎってばかりいましたね

「Kちゃんとおたし、れんあいうんがぴったしなのだそうです。

でもね、けっこんうんはぺけなのですよ。」

三月三日

みずからの痛みを騙しつづけて希望をつないだ

火薬の春

春の火薬

お雛さまに裏切られ

みずからを裏切って生まれかわるのに

急いでいましたね

あんまりあつくなりすぎては

やさしいおばあちゃんになれませんかよきみ

ほら くつきりと濃い桃の花をくわえ

冬の鳥たちが昇天しましたよ

愛子さんとチョコレート・パフエ

青木栄瞳

「愛子さん」ですか……

「幸せ」をたくさん呼び込みそうな、お名前って、ありそうですね、

これから、もし、

わたしに、女の子が授かったら、

「チョコレート・パフエ」という甘い名前をつけよう、っと。と、

きめています。

—— (Sunday, s Sunのメニューにあります。

旬の新鮮ないちごをソフトクリーム仕立てのデザートにしました。大盛りのパフエ、380円。チョコレート・クリーム・マロン・バナナ)

レストランのガラスケースに飾られている

豪華絢爛・のパフエを眺めるたび、

わたしは、

地球のなかで、

いま、あそこだけ、は、

確実に、甘い、幸福が、こぼれそうな場所がある。な、つと。と、

おもうのですが、

2001・12・9も

早朝から、

喜びのパフエのことを

こころに浮かべては

マッチ売りの少女のような気分になっています。

主人のかいしゃも、あぶないです。

世界も傷だらけです。

あかるい詩も、暗い詩も本気にならなければ、かけないです。

チョコレート・パフエいっぱいのお笑みをください。

2001.12.9

日本のニュース・パフエです（日経・朝日記事より）

鹿島V2・狂牛病・感染ルート・奇跡を起こすケア・安くて豪華・

風呂自慢・予測の法則・発見したら報奨金・ヤツデの花・339度

ブラスバンドの社会史・世界の無名戦車・満足度90%・母乳・

留学に大金くれた母・宝くじナンバーサービス・心と技・続々催行

決定！お急ぎください・母の胸ですやすや・今すぐポストへ・

無料で・スープ健康法・仏・アルゼンチン本命・テロ対策・・・・

はい、SIDE・MENUは簡易書留でおおくりします。

わたしに女の子が授かったら
チョコレート・パフェいっぱい
の笑みをください。

ブループラトール

ていだきねこ

玉の腹擦りつつゆけばみんなみのゴミ箱に入る古りし文ども

てのひらで包み込んでねクリックは一度にしてねウェブを見るなら

あたらしき書類ひらけばましろなる四方かがよういぎこぎ出でな

電源の供給常に本体に頼るこの身よマウスかなしも

本体に先立たるる日ふたたび来マウスはよわしきれどしづとし

アイコンのまほろばデスクトップなるあおき平野を今日もたびゆく

痛覚を遮断するべし我々は走査はするが保管はしない

冬の姉たちへ

高田昭子

冬子ねえさんは クリスマスの夜に

「わたしの恋人をたのむわ」と言っただけで死んだ

夏子ねえさんは やっぱ寒い朝に

「あなたの恋人を奪えなかった」と言っただけで死んだ

寒がりのわたしには

ほんとうにつらい冬が続いた

冬子ねえさんの恋人を頂くつもりはないし

夏子ねえさんが好きだったひとなら

いつでもあげたのに

今のわたしはあたらしい恋をしているから
もう重い過去なんていらぬのに
気まぐれなねえさんたちは

フワフワとわたしの肩に降りてきて

「あのひとは元気？」とたずねるの

あのひとたちはとびつきり元気よ

この世には生きてる女がごまんといふし

いつでも己の愛は崇高だと思っているもの

わたしの愛？

崇高だとは言い難いけれど

愛しているのに寂しさばかり

恋人はとびつきり貧乏で

セクシーなハゲ

「フェックション！」

ねえさんたち またわたしの悪口言っているわね

冬の病院の待合室は

赤ん坊の泣き声

老人の切れのわるい咳の音

ねえさんたちの来るところじゃないわ

わたしの恋の病いもここでは直らない

取りあえず

やさしい眠り薬と風邪薬

病院を出れば木枯らし

しばらく恋人に逢っていないから

わたしは寂しさにごごえそうよ

ねえさんたちはもう

クスクス笑いながら雲の布団の中でしょう？

あおのいたまま

一本指

しあ わせ はこぶ

あおい とり はじつ は

はと だった と いい ます

あお かった から

はば たけ ば

はれ た そら に とけて

みえる こと かな わず

つか まえる こと かな わず

ひとつめ の ほし

なが れる まで

ま ばたき せず

みつ め つづ けて

ただ あお のい た まま

(シャルル・ド・ポワソン掲示板、http://210.167.252.19/905494/dbs_plain 11月25日より)

いつも、送電塔

阿瀧康

きょうは 曲っていかなければいけない道を二回
曲がり損ねた。

いい日じゃなかったかというところでもない
ここは 鉄塔が 整列している。

そのひとつひとつに わたしの名前がついている
いままで話す機会がなかったけれど こうやって

わたしは わたしのを増やしてきたのだ
信じられなければ そうだな。

いま きみのとなりに立っている（よく見えないが）
その人への送電を止めるよ。それでわかるよ。それじゃ。

恋のゆくへ（俳句）

koko（賀川紅子）

この恋のゆくへはいずこコスモスよ

湯冷めして理屈通らぬ母の鬱

くつきりと飛行機雲や春を待つ

耳袋自転車降りて歩き出す

椿散る鏡の中のひとりの夜

ラーメン屋大冷蔵庫外にあり

沙羅の花ある晴れた日にサリー着む

トラックに銀河中央フリーウェイ

出稽古の仙台坂や秋暑し

かまど馬深夜男とすれちがふ

鰯雲どこまで人を受けとめる

いつまでも自由業なりちゃんちゃんこ

I love New York

吉野茂

騎兵隊は

ウソつかない

コーンフレググに

石油をまぶした

映像のかたまり

紙幣をする

自動装置の羊さん

怒った丸裸に

された機械の

スクランブルエッグ

トランキライザーでできた

刺とげの New York

星が揺れるよ カウンセリング

正しき人の二重拘束を

風がわらって

影が見えるか

島惑ひ 私の

石川為丸

やうやくたどりついたが、すでにデイゴの花は終つていた。この高台に海風が吹きはじめ、光りの中で、邦がそのちひさな旗をはためかせてゐたのは、いつのことだらうか。浦添城址。その建造物は、薩摩藩の侵攻により焼失し、先の沖繩戦では焦土と化し、今はわずかに石垣が残るだけである。過去の傷をとどめる この高台から、すぐそこに東シナ海が見渡せる。ひらけてゐる白い建物の並ぶ市街地、そこで多くの人たちが生き暮らしてゐるのだ。この静やかな南のとき。(闘ひも敗亡もはらはらと海のはうへこぼれていくやうだ。) 揺れる梢を見あげれば 広がる瑠璃の空。死者たちはどこへいつてしまつ

たのか。暗がりですすこし降りれば、ひっそりと伊波普猷の墓が立つてゐる。遠方からの 島惑ひ。一九四七年六月、伊波普猷はその絶筆、沖繩歴史物語の小序に、戦災による故郷沖繩の被害を想ひ、「島惑ひ」した私は…、と記してゐた。そして、「せめてその文化の歩みを略述して、故郷を偲ぶよすがにしたい」とも。（きつとその思ひは風に運ばれ、このうつくしい島にとどめてはゐるのだらう。）ガジュマルの根の絡まる、琉球石灰岩の暗い空洞をのぞきこんでゐると、わたしは どこにも属するところのない 異風な声の、なにものかによばれてゐるやうだった。浦添城址から、さらにつづく わたしの旅を想ふ。仏桑華の赤は、あくまでも鮮やかに、島でのかなしみを、まだ、終つてはいけななくてもいふかのやうに、彩つてゐた。いつのことだらうか。私の惑ひをはしらせ、頭在する表現に すぐにはつながらない、外の言葉 路上の言葉。こころざしなかなばで倒れたものらの、果

たされなかつた思ひと、そのうつくしい過誤が、にぎわしくいきかふ、そんな市が立つのを見とどけるのは。（死者のはうへ、廃墟のはうへ、吹き抜けて、私だけの死語をひきださう。）そしてわたしの旅を調へるのだ。消え入るやうにして、しかもそこらに見え隠れする、精霊をそだててゐる、わたしの惑ひをはしらせた この島から。

（うろこそえ文芸 2001. 4 第6号より）

色・かたち

片野晃司

2001年8月10日 午前5時32分

私は今 机に向かっています

椅子 机 固く私を支えるもの

それらに支えられながら

着実に崩れていく私

色もなく明けていく曇り空のように

なすすべもなくやってくる

私の 崩れていく私の

(カッコ 崩れていく私の (カッコ 原初の私の

その場所にそれがあって

その影が細く細く

光る床の西日を分割したのを

もつと近くで見ようとしたとき

(支えるもの) に額を打ちつけ

その痛みをこらえながら

見上げた水平部分が

低く覆い被さって見えたとき

私は何を感じたのか

それこそが

机と私を結びつける 机と私と

机と私と 机と私と

机と私と

机と私とカナリヤと

机と私と電話のベルと

机と私と額の痛みと

私のたんぱく質の

不確かな場所に

机が机として立脚している

私のたんぱく質の

不確かな場所が

机の立脚点として

用意されている ー カツコトジ

ー カツコトジ

私の机が

あなたの机ときほど遠くない場所にありますように

1999年9月30日10時35分

茨城県東海村JCO

黄色い液を貯めたポットの中に

青白い月が出現した

漏斗とバケツを使って

月を地上に降ろしたのだ

ぎこちないしぐさで

「青い光を見た」※

大内さんは沈澱槽のそばに立ち、5リットルのビーカーから硝酸ウ
ラニルを沈澱槽に流し入れる作業をしていた。大内さんが受けた放
射線量は、17シーベルト(Sv)と推測されており、当初は重症の下痢、
意識障害があり、白血球数が高く(25,000)、発熱していた。

その後、急性放射線障害の典型的な症状である全身の7割に及ぶ熱
傷、呼吸器の障害、免疫力の低下などが生じた。その間、病院では
造血機能回復治療や輸血、大規模な皮膚移植を繰り返すなど治療を
行っているが、11月27日には「危険な状態」に陥り、12月21日23
時21分、入院先の東京大学付属病院において放射線被ばくによる多
臓器不全で死亡した。

(日本原子力産業会議 記事より)

茨城県東海村の核燃料加工会社「ジェー・シー・オー(JCO)」東海事業所の臨界事故で、大量の放射線を被ばくした同社社員、篠原理人(まさと)さん(40)が27日午前7時25分、入院先の東京大病院(東京都文京区)で多臓器不全のため死亡した。昨年9月30日の事故発生から211日目。

篠原さんは、放射線障害に伴う肺機能の低下や胃などからの出血が続き、4月20日には腎(じん)臓の機能が低下して無尿状態になった。その後、治療の薬物投与による肝機能の悪化も重なり危篤状態に陥っていた。

篠原さんの被ばく線量は、大内さんに次ぐ6〜10シーベルトと推定された。これは、一般人の放射線被ばくの年間許容限度の6000〜10000倍に相当する量だった。

(毎日新聞記事より)

遠藤君の誕生日に(それはたぶん10歳か11歳か)母が遠藤君の誕生日のお祝いに水彩絵の具36色セットを包んでこれを持っていきな

いと言った（欲しくても買ってくれなかったくせに）、遠藤君の家
に行くとは家は留守だった。

帰り道、私はわざと包みを放り投げたりして、
プレゼントは翌日渡した、チューブが何本か破れていたそうだが、後
でそう聞いただけのはずだが、なぜかはつきりと思いつける、破れ
ていたのはビリジアンとセルリアンブルー、

2001年8月10日6時30分

カナカナカナカナ

カナカナカナカナ

机と私とカナリヤ

机と私とカナリヤ

カナカナカナカナ

カナカナカナカナ

カナリヤの色

カナリヤの目

カナリヤと机

机の上の絵の具

ビヅリアンとセルリアンブルー、

それは私の、(カッコ 崩れていく私の、(カッコ

私、が思う(カッコ 遠藤君が思う私の、(カッコ

遠藤君が思う私の思う遠藤君の

思う私が思う遠藤君の

不確かに重なった、

～カッコトジ～カッコトジ～カッコトジ

干潟の足跡だ～カッコトジ

干潟の足跡だ

2001年8月10日9時30分

私はまだ詩を書いています

そろそろ仕事へ行く支度をしなければなりません
454gの豆からおいしいコーヒーを40杯以上入れられる方法は見つ
かかっていないそうです（スターバックス調べ）

河の風景

関富士子

兩岸を「ガケ」の記号にはさまれた

第二発電所から西の城跡まで

せまい谷をつくって蛇行する河が

古い段丘のかさなる平野部に至り

いくつもの中州を残してひろがるあたり

整地された河川敷に建つ

養豚センター

稚蚕共同飼育所

林業試験場

砂利採取場

地図を見ても区別がつかない

それらのひらたい窓のない建物の上に

観覧車が回っている

空に浮きあがるように見える

遊園地ができたのだろうか

音楽も歓声もきこえないが

たしかにゆつくりと回っている

ゴンドラのなかの恋人たちの姿は見えない

冬の河原はどこまでも平坦で

堆積岩には水の流れのような筋が入っている

観覧車のほうへ歩いていく

河はゆるやかなのに

ごうごうという水の音がきこえる

近づくにつれて激しくなって

見あげると

観覧車が水しぶきを上げている

回転する輪の全体からきらめいて飛び散る

びしょぬれのゴンドラのなかのびしょぬれの

恋人たちの姿を思いながら

空いっぱいになるまで近づくと

それは観覧車ではなく

巨大な木製の水車だ

放射状に伸びる二重のスポークの先に

太い曲げ輪がはめられ

ゴンドラほどの堅牢なバケットが

水をぎあぎあとおぼしながら

つぎつぎに頂上まで運ばれていく

光をあたりに撥ね散らして

ゆっくりとかしいで下りてくる

水車にゴンドラはついていない

びしょぬれのゴンドラのなかにびしょぬれの

恋人たちはいない

河から引かれた水が車の下をとおって

とほうもない力で輪回しをしている
直立した円はいつまでも左に回る
顔にしぶきがかかって全身が湿るので

長いこと歩いたのだ

喉が渴いている休みたい

プールに水はなくロープが張られている
だれもないレストハウスに入ると
壁のモニターは

河の源流のぬれた羊歯に光が差し

霧を立たせ葉にしづくをしたたらせ
ちいさな流れになるようすを

くりかえし映している

窓にむかう席にすわると

水車の右下4分の1が

目の前いっぱい迫っている

水路に潜ったバケツが姿をあらわし

水を惜しげなくあふれさせてから

きりもなく上がっていく部分

この位置からだとは右回りだ

上半分と左下の部分は見えない

下りてくるバケツトはここからは見えない

近すぎる

と思いつながらすわっている

“rain tree” no. 19 2001. 1. 25 よび

横たわる人

清水鱗造

夜の舗道に這いずる

ウミウシのように軟らかい人

町の隙間にとろとろと入る

その罅の遠くから

つぶやかれる

海のことを

聞きなさい

遠くで老いる人のことについても

罅は歩道から上空まで

にじむようにつながって
罅の町となって覆う

横たわる

軟らかい人の手には

細いガラスの小枝がはみ出して

使う乗り物も告げられる

透ける時計

臓物が溶けている

どんなに小さな隙間にも染み入る

流れる軟体の皮膚に

聞いた内容が延々と

黄色く配置されていった

千円

か / kaoki

風の噂で知った

通勤途上の橋げたに住んでいた

というより橋の一部になっていた男

道を進んで居ても通りがかりの子供さえ

振り向かないほどに地球の一部になっていた

黒ずんで目だけが異様に回転していた男が

昨日道端に倒れて目を剥いていた

という

たまたま通りかかった婦人が

もしもしと呼びかけたけど

返事はなく

婦人の勇気に集まってきた人たちの一人が

携帯で救急車を呼んだそうだ

やがてサイレンを鳴らしてやって来た救急車

ドアを開けて降りてきた救急隊員は

男の左手の脈を調べ

暫くして首を横に振った

男を収容して

遠ざかる救急車のサイレンは

ドップラー効果で

ふらついた音程を撒き散らしながら遠ざかる

集まった人たちは

一様に空を見上げてから

肯いて再び道を歩み出す

男は一週間前

インスタントラーメンカップを十個（一個百円のセールス中だった）を
両腕に抱きしめて

突然スーパールのレジに現れたそうだ

悪臭の漂う男に息を止めたレジ係は

男から千円札と五十円玉を受け取ると

慌ててビニル袋にカップを

入れて男が出ていった後で

深呼吸をしたそうだ

レジを通過した男は

カップ十個全てのビニルカバーを破き

蓋をこじ開けて

スーパ備え付けのポット

から湯を注いで

大きなビニル袋に十個をそっと

入れて

ドアを出ていったそうだ

恐らく十個分のラーメンを

この世は天国と

呑み込んだに違いない

呑み込んで腸閉塞になり

1週間橋の下でうなつて

苦しさに道へ歩み出て

この世を去ったのだろう

カップラーメン十個分の千円は

もしかすると、

丁度一週間前

私が

「これあげる」と言って

男に渡した千円だったのだろうか？